

聖書：ローマ 4：17～25

説教題：私たちも義とみなされる

日時：2015年7月19日

パウロは「信仰義認」の教理を確かなものにするため、4章で旧約聖書の実例に訴えています。彼が特に取り上げているのは信仰の父アブラハムの生涯です。3節には創世記15章6節の御言葉が次のように引用されました。「それでアブラハムは神を信じた。それが彼の義とみなされた。」ここに彼が義と認められたのは、ただ信仰によったことがはっきり示されています。そして9～16節にかけてパウロはさらにユダヤ人から出て来るであろう反論に答えました。すなわちユダヤ人は割礼を持っていることを誇っていました。また律法を持っていることを誇りにしていました。この割礼を持っていること、また律法を持っていることが、神に義と認められることにおいて重要なカギを握っていると彼らは主張したかった。しかしパウロはそれも退けました。アブラハムはそれらにはよらず、ただ信仰によって義と認められたことを述べて来たのです。

ではアブラハムの信仰とはどういう信仰だったのでしょうか。それがより肯定的な仕方です。述べられている部分が、これから見る17～25節です。私たちはここに私たちが見ならうべきアブラハムの信仰とはどういうものなのか、アブラハムの霊的な子孫として歩むために私たちはどうあるべきか、について教えられることができるのです。

アブラハムの信仰について学びたい一つ目のことは、彼が「死者を生かす神」を信じたことです。この「死者」とは誰のことでしょうか。ヘブル書11章に、イサクをモリヤの山の上でささげた出来事を指して、アブラハムは神は人を死者の中からよみがえらせることができると信じたと記されています。このことからここでの「死者」はイサクを指していると考えられる人はいないかもしれません。しかしローマ書の文脈では、そうでないようです。この「死者」はアブラハム自身のことです。19節に「アブラハムは、およそ百歳になって、自分のからだも死んだと同然であること」を知っていたとあります。アブラハムは神から子孫の約束を受けていました。あなたを大いなる国民とすると主なる神から言われていました。しかしその約束はなかなか実現されず、彼はこの時におよそ100歳になっていました。その彼を指して、ここで「死者」と言われているのです。もちろん子を得ることに関してです。そして死者はもう一人いました。彼の妻サラです。彼女についても19節に「その胎は死んでいた」と書かれています。ですから普通に考えたら、こんな老夫婦から今さら子どもが誕生するはずがない。自分たちはこのことに関してはどうの昔に死者となっている。しかしアブラハムはそんな自分たちを用いて、なおも子孫を与えると約束される神を信じたのです。

2つ目にアブラハムは神を「無いものを有るもののようにお呼びになる方」として信じました。「無いもの」とは、まだ存在していないものことで、ここではアブラハムの子孫を指しているでしょう。18節に引用されていますが、創世記15章で神はアブラハムを外に連れ出し、夜空の星を仰がせ、星を数えることができるなら数えなさいと言われ、「あなたの子孫はこのようになる」と言われました。そう言われても現実には一人も子孫はいません。約束が与えられて随分時間が経つのに、それが果たされそうな兆候すらありません。しかし今、目の前になくても、神はそれを有るもののように呼んでおられる。なぜ神にはそうできるのか。それは神にとって将来になってみなければ分からないあやふやな事柄ではなく、必ず実現する事柄だからでしょう。たとえ今それはなくても、神がそうお語りになっているなら、必ず神はそのことを実現される。アブラハムはそのように神の全能性を信じ、また神の真実を信じ、その神に自分の全信頼を投げかけたのです。

彼の信仰から学ぶ3つ目のことは、彼は望み得ない時に望みを抱いて信じたことです。アブラハムの信仰は、信じるのがたやすい状況で示されたものではありませんでした。むしろあらゆる状況は彼の信仰とは逆のことを示していました。しかし良く考えれば信仰とはそのようなものでしょう。望みを持ってそうな状況で望みを持つことは誰にでもできます。それなら信仰はなくても良いと言えるかもしれません。しかし望みを持ってない状況でなお望みを持つとしたら、それはただ「信仰による」ということでしょう。ですから私たちは状況が悪くなってきたら信仰を持ってなくなるというのはおかしいことになります。状況が良い時にだけ保てると言うなら、それは本当の信仰ではないのかもしれませんが。それはただ肉的な感覚、人間的な感覚で安心しているだけなのかもしれません。むしろ信仰とは、普通の人間の感覚では望みを持ってそうならない状況で、その真価が発揮されるべきものでしょう。ですから私たちは困難な状況に陥った時、この時こそ、頂いた信仰の価値が現わされるべき時だと考えて、一層雄々しく神に頼るように導かれたいと思うのです。

実際20節に、アブラハムはこのようなかで「信仰がますます強くなった」と書かれています。私たちは困難な状況では信仰が弱くなると考えがちです。苦しい中では心が弱くなって、信仰どころではなくなると。しかし先ほども述べたように、困難の中でこそ、私たちの信仰の力は輝き現れるべきです。そしてさらに試練の中で私たちの信仰は強くされるのです。どうしてでしょうか。それは試練によって、私たちの信仰は言わば筋肉をつけさせられるからです。運動選手もより強く、優れた選手になるためには負荷をかけたトレーニングを行いません。毎日、怠惰に、楽な練習しかせず、筋肉を使わないでいると弱くなってしまいます。2〜3年前の話ですが、テレビか何かを見て刺激されたせいか、自分で今、腕立て伏せがどれくらいできるか、久しぶりに

試してみたことがあります。高校時代に運動部でやった時のイメージで20回くらいは余裕だろうと思ってやってみると、予想以上に体が重く、10回にたどり着くかたどり着かないかのところでへたばってしまいました。あまりの惨めな結果にショックで、それから数ヶ月間、空いた時間を見つけてトレーニングしました。その内、だんだん回数が増えて行って、20回連続も余裕、30回連続も余裕、それかける2セット3セットをやっても大丈夫！さらにもっと負荷をかけた仕方で、などとやってみました。でもそれはもう2年ほど前の話で、いつしかやめてしまいましたので、今やったらまた10回くらいしかできないのではないかと思います。しかし今、話しているのは信仰の筋肉です。これが強められるためにはある程度の負荷が必要です。信仰によってしか乗り越えられない状況に追い込まれ、そこで信仰による歩みへ追い立てられることを通して信仰の筋肉をつけさせられる。もちろん度を越えた負荷をかけることは禁物です。かえって筋肉を痛め、壊してしまいます。しかしこの点で私たちは心配は要りません。なぜなら神は私たちが耐えられない、重すぎる試練は与えないからです。1コリント10章13節に「神は真実な方ですから、あなたがたを、耐えられないほどの試練に会わせるようなことはなさいません。」とあります。ですから私たちは試練に会った時、自分はこれでつぶれてしまうかもしれないと恐れたり、不平不満を漏らすのではなく、これは私の信仰を強くするために神が備えてくださった特別な学びの場なのだ、神の守りの中で与えられているトレーニングの場なのだと考えたいと思います。アブラハムはその導きの中でいよいよ神に信頼し、信仰において強くされました。そして神に栄光を帰しました。神には約束されたことを成就する力があることを堅く信じ続けました。この信仰によって彼は神に義と認められる祝福に生きたのです。

では私たちにこれはどう当てはめられるのでしょうか。パウロは最後にアブラハムと私たちの関係について述べています。23節で「彼の義とみなされた」という創世記15章6節の御言葉は、ただアブラハムのためではなく、私たちのための言葉でもあります。すなわち私たちもアブラハムと同じ信仰に生きれば、彼と同じように義と認められる。では私たちはどのように生きれば良いのでしょうか。24節でパウロは言います。「また私たちのためです。すなわち、私たちの主イエスを死者の中からよみがえらせた方を信じる私たちも、その信仰を義とみなされるのです。」ここに私たちがアブラハムのように歩むとは、主イエスの死者からの復活を信じる信仰に生きることだと言われています。一体アブラハムの信仰と私たちの信仰との間にどんな共通点があるのでしょうか。アブラハムの信仰は、17節で見たように、死んだも同然の自分、死者そのものである自分を生かしてくださる神を信じる信仰でした。それに対して24節で言われているのは、死者であったイエス様をよみがえらせた神を信じる信仰です。「死者を生かす」という点では同じである。しかし片方はアブラハム自身を生かす話であ

り、もう片方はイエス・キリストを死者から生かすという話です。ここには違いもあるのではないかと思う方もいらっしゃるかもしれません。しかしイエス様の死と復活は何のためのみわざでしょうか。それは霊的な死者であった私たちを生かして下さるための神のみわざです。ですからイエス様を死からよみがえらせてくださった神を信じる信仰は、アブラハムの信仰と同じなのです。それは結局、神が死者である私をいのちへ導いてくださるみわざであるに他ならないからです。ただここには神はどのようにして私たちを死からいのちに生かすことができるのか、その具体的な根拠がはっきり示されているのです。これはアブラハムに対する神の約束の成就なのです。

私たちは神の啓示は歴史の中で少しずつ明らかにされて来たことを、よく考えに入れなければなりません。アブラハムへの約束にはメシヤの約束が含まれていました。ヨハネの福音書 8 章 56 節：「あなたがたの父アブラハムは、わたしの日を見ることを思って大いに喜びました。彼はそれを見て、喜んだのです。」しかしこのことは、アブラハムが今日の私たちと同じようにイエス様のことがはっきり分かっていたということではありません。むしろ彼が見ていたメシヤ像は、私たちが今知っていることに比べればはるかにぼんやりしたものでしかありませんでした。大体の輪郭をスケッチできた程度でした。しかしそのアブラハムに約束された救いは、歴史が進む中で、イエス・キリストにおいてははっきり示されました。ですからそのことが 24～25 節では、よりはっきりと詳しく述べられているのです。25 節に述べられているように、イエス様の十字架上の死は私たちの罪のためでした。信じる者たちの罪の赦しのために神の御子の尊い命がささげられなければなりませんでした。そしてイエス様は三日後に復活されました。これも私たちのための御業です。もしイエス様が十字架上で死なただけで復活されなかったらどうでしょう。私たちの罪の代価を代わりに支払おうとしたイエス様のみわざは成功したのかどうか、誰にも分かりません。むしろイエス様が死の下に閉じ込められたままだったら、それは成功しなかったのだろうと結論するのが自然でしょう。しかしイエス様が死から復活したということは、イエス様がしようとしたことは完全に成し遂げられたということの意味します。すなわちこの方により頼む者の罪は本当に処理され、精算されている。そしてイエス様がまことのいのちに生きているように、信じる者たちもまことのいのちに生きることができる。神はイエス様を死者の中からよみがえらせることを通して、私たち死者を生かして下さると信じるなら、私たちもアブラハムと同じように、その信仰を通して義と認めていただくことができるのです。

果たして私たちは、ただ神の恵みにより、神の前に義と認められるというメッセージを信じる者でしょうか。果たしてこの自分が聖なる神に義と認められることなどあり得るのでしょうか。自分を見つめる限り、それはとてもありそうにないように思い

ます。しかしそこで自分を見るのではなく、ただ神を見るのがアブラハムの信仰です。アブラハムは自分は死者であることを知っていました。何の望みもない者であることを認めていました。しかしそんな死者を生かしてくださる神を信じて義と認められました。私たちも同じです。自分を見る限り、「死者」で良いのです。自分の内に何も良いものがなくて良い。死んでいて、腐敗していて、何一つ自分の救いに貢献できない者であって良い。しかしそんな者たちのために神がしてくださったこと、すなわちイエス・キリストを死者の中からよみがえらせてくださったこと、この方にあって私たちの罪を赦し、死者である私を生かしてくださること、そのことを信じる信仰を通して、私たちも義と見なされるのです。ですから私たちはいつまでも自分の内側を見て、こんな自分では、と言っていてはなりません。自分は過去にこんな大きな罪を犯したし、今もまだまだ罪が解決できていないからなどと言っていてはなりません。私たちは神の前では「死者」です。しかし神はそんな死者を生かしてくださるお方。そのために御子を遣わし、十字架に付け、よみがえらせてくださいました。イエス・キリストに起こったことは、霊的な死者である私たちを生かすために神が行なってくださったみわざです。この神を仰ぎ、この神の恵みにただより頼む者を、神はイエス・キリストにあって義と認めてくださるのです。「主イエスは、私たちの罪のために死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられたからです。」